

一人一人が変えられる世界

師勝中学校三年 長瀬 怜

一九四五年八月六日、あの日に広島に立ち上がったきのこ雲。その下で起こっていた出来事をあなたは知っていますか。

私は今回、平和の使者として、広島を訪れました。今までも、平和記念式典の中継を見たことはありませんでしたが、実際に広島を訪れるのは初めてでした。青い空の下に広がるビル街や路面電車、七十二年前に原爆が落とされたとは思えないほどきれいな街でした。

広島平和記念資料館では、被爆体験伝承講話を聞かせていただきました。太陽のような熱球が現れ、地面は鉄を溶かすほどになり、音よりも速い風が吹いたそうです。そして、ここで何とか助かっていても、皮膚がカーテンのようになだれ、目玉が出ている死体がある中、水を求めながらさまよい、亡くなっていく人々がいました。資料館の中にあつた写真や展示物も。それを物語っていました。大やけどを負った人々の写真、一瞬にして焼け野原となった広島、焼け焦げた服、熱で溶けて変形したガラス瓶。その一つ一つが、見る人に何かを訴えかけている、そう感じました。

翌日の八月六日、私達は平和記念式典に参加しました。八時一五分に鳴り響いた平和の鐘が、今でも思い出されます。私は、この式典で広島の二人の小学生が言った「平和への誓い」を忘れることができません。原爆は命や街だけではなく感情までも奪ったこと、あきらめずに今の広島を造った人々がいたこと、そして、広島は平和を考え、誓い、未来を考えるスタートの場所であること。強く語られたこれらの言葉が、二日間の中で特に印象に残っています。

今でも、世界中で戦争や紛争が起きています。中でも、アメリカと北朝鮮は今にも戦争が始まりそうです。なぜ、今でも戦争や紛争が無くならないのか、その理由は、暴力や武力で問題を解決しようとする人がいるからだと思います。私は、身近な暴力の一つが積み重なり、戦争へつながっているのだと思います。まずは私達一人一人が、暴力を認めてはいけません。意見の違いがあるなら、暴力や武力ではなく話し合いでお互いが納得できる解決策を見つける努力をすべきだと思います。

もう二度と新しい戦争を起こさないために、私達の小さな努力から始めていきましょう。

ヒロシマを忘れない

西春中学校三年 水野 太陽

一九四五年（昭和二十年）八月六日、午前八時十五分。広島に、一発の原子爆弾が投下され、一瞬で街は、火の海と化しました。それまで、当たり前であった人々の日常、笑顔、未来、全てを奪い去っていききました。

僕は、その時起こったことを学ぶために、平和の使者として、広島に行かせて頂きました。当日は、七十二年前と同じ、とても暑い日でした。広島はとてもきれいな街で、僕は七十二年前はがれきの山だったということ想像できませんでした。しかし、被爆者の方の話を聴き、原爆資料館で、実際の写真を見ているうちに、それがそう遠くない昔に、現実に起こったことなのだと、頭ではなく感情で理解するようになりました。

原子爆弾が投下されたとき、地面の温度は三千〜四千度にまで達したそうです。そのとき僕は、三千〜四千度という温度が具体的にどのくらいの温度なのか分からず、ただ熱かったということしか分かりませんでした。しかしその後、鉄が溶ける温度は千五百度だと聞かされたのです。なんと原爆の落ちた地面の温度は、その二倍以上に達していたのです。

僕は驚愕しました。また中心温度は、太陽の表面温度よりも高いとも教えられました。まさに太陽が広島に落ちてきたのです。それほどの熱と放射線が広島の街を襲い、建物は吹き飛びがれきとなり、飛び散ったガラスが人々のからだに容赦なく突き刺さりました。辺りには、そこらじゅうに男女の区別もつかないような、黒く焼け焦げた死体が散らばり、真っ黒い顔をした人々が、焼けただれた皮膚をカーテンのように垂らしながら、水を求めてさまよい歩きました。誰もが目を覆い、耳をふさぎたくなる光景、まさにこの世の地獄がそこにはあったのです。

このような悲劇は二度と繰り返してはなりません。しかし、世界をみれば多くの国が核兵器の開発競争にしのぎを削っています。では、この世界から核兵器を無くすためにはどうすればいいのでしょうか。僕は、世界中のすべての人々に七十二年前に広島に起こった惨劇を知ってもらうことが、核のない世界への第一歩だと思っています。原子爆弾がもたらす悪夢や非人道性を知れば、誰もがおのずから、核兵器は悲しみや苦しみ以外何も生み出さないということを強く認識するでしょう。

被爆者の平均年齢が八十歳を超えた今、原爆の惨状を体験した人は少なくなってきました。平和な世界を作るのは、未来を生きる僕たち一人ひとりです。原爆の悲惨さを学び、平和の尊さを後世に伝えていくことは、唯一の被爆国である日本に生まれた、僕たちの使命なのです。

次の世代に伝えるべき想い

白木中学校三年 角田 龍侍

「広島」今は大都市として栄えています。僕が実際に行ったときもそうでした。周りには大きなビルが建ち並び、緑もありました。そこからはとても七十年前の地獄は想像できませんでした。

七十二年前、八月六日。その日はよく晴れていました。明るい空からまさかあの地獄が降ってくるとは、誰もが思っていなかったでしょう。午前八時十五分、原子爆弾によって緑豊かな山々に囲まれた広島は一瞬にして燃えさかる炎と、火傷によって溶けた皮膚を垂らしながら血だらけになって助けを求め人々で赤く染められてしまいました。

僕は広島に行き、広島平和記念資料館でこのような地獄の記憶を目の当たりにしました。性別も分からないほど黒く焦げた遺体や八時十五分で止まってしまった腕時計、焼け野原となった広島などの写真を見ました。それらは言葉では上手く表せないくらい残酷で悲惨な気持ちにさせるもので、僕は胸がしめつけられる思いになりました。

「安らかに眠ってください 過ちは繰返しませぬから」

この言葉は石碑に刻まれていた、僕が最も心に残った言葉です。全ての人が原爆犠牲者の冥福を祈り戦争という過ちを再び繰り返さないという思いが込められています。この言葉を見たときは、戦争がどれだけ人々を苦しませたか、また残された被爆者の家族がどれだけ悲しんだか強く考えさせられました。そして僕はこのような地獄を二度と起こしていけない、だからこそ僕達人類はこの記憶を現代から未来へと受け継ぎ、戦争を起こさないよう一人一人の心に刻んで行動しなければならぬ。そう思いました。

僕達が望む「平和」とは何でしょうか。平和の反対は「戦争」なのでしょう。僕はそうは思いません。戦争という脅威が無くなるだけで平和になるとは言いきれないと思います。ただ僕には「平和」の本当の意味がまだ分かりません。でも、この世から核兵器が廃絶されることで平和への一歩になることは分かります。核兵器の一発の威力が数千倍にもなった今、全世界を地獄へと変えることができます。もし現代や未来に核兵器が落とされたらどうでしょうか。命だけでなく生きる希望までも焼き尽くす、極めて危険で非人道的だと言っているのでしょうか。しかしそのような「絶対悪」である核兵器は、一万五千発以上地球に存在し、開発を進める国も存在しています。これでは人類が望む世界恒久平和にはなるはずがありません。だから僕達が平和になるために課せられた使命はまず核兵器の廃絶だと思います。それが実現すれば、平和へと繋がるの

ではないでしょうか。この世から全人類の脅威である核兵器が作られることなく、また、廃絶されることを平和への思いと共に強く願います。

ノーモア・ヒロシマ

訓原中学校三年 井上 凜

「原子爆弾が落ちて、広島街は焼け野原になった。」歴史の授業や、祖父から何度も聞いた話です。そんなイメージが強かったため、新幹線から降りて広島街を見たときは驚きました。七十二年前、この街に原子爆弾が落とされたとは思えませんでした。

さらに大きく私の予想を超えていたものがあります。それは、原子爆弾が落とされた後の惨状です。平和記念資料館にはたくさんの写真や遺品が展示されていて、戦争の残酷さ、恐ろしさを訴えているようでした。

熱で変形した瓶。血がついて破れている服。性別もわからないほどやけどを負った人の写真。階段に焼き付けられた人の影……。これらを見た私は、ただ「怖い。」と感じました。そして、この悲劇を繰り返してはいけないと強く思いました。

八月六日、私たちは平和記念式典に参加しました。午前八時十五分、公園の全ての人が一時間黙祷を捧げました。七十二年前の八月六日も今日と同じように晴れていたそうです。

式典で多くの方のお話を聞きましたが、特に印象に残ったのは広島市の小学生の話です。

「広島で育った人間だからこそ、七十二年前にここで起こった悲劇を後世に伝えていかなければならない。」

この言葉を聞いたとき、私は、広島の人たちの心の強さを感じ、この思いがあったから今の広島街があるのだと思いました。

参加者の中に外国の方も多くいました。代表として招待された方以外にも、自分の意志で来ている人も多く、炎天下、熱心に話を聞く姿が印象に残っています。世界中の人が原子爆弾に関心を持っていることをあらためて実感しました。「ノーモア・ヒロシマ」(原爆投下による広島市の悲劇を二度と繰り返すな)アメリカの作家によって提唱され、原水爆禁止運動のローガンになった言葉です。唯一の被爆国である日本が中心となって平和を訴えていく責任があると私は強く感じています。

世界では核を保有する国もありますが、「広島での悲劇を繰り返してはいけない」という思いは人類全員が持つべきです。より多くの人が核廃絶について考えるためには、原子爆弾やその被害について知識を身につけなければなりません。被爆者の方や遺族の方に戦争の惨さを伝える使命があるとするならば、私達には、常に原子力・核について学び、今後どうしていくことがよいのかを

考えていく責任があると思います。

今回、平和の使者として広島で貴重な体験をさせていただいたことに感謝しています。今後は、多くの人に今回の体験で学んだことを伝え、平和の使者としての務めを果たしたいと考えています。

何を学ぶべきか

熊野中学校三年 日比野 倫果

一九四五年八月六日、午前八時一五分、広島は一瞬にして、地獄と化した。焼けただれた肌、飛び出た眼球、山のように重なった遺体。もう家族は帰ってこない。泣き、笑い、幸せに過ごした日々はもう二度と送ることはできないのだ。

もし今、原子爆弾が私たちの町に投下されたら、どうなってしまうのだろうか。もしかしたら、自分だけが生き残り、大切な人を失ってしまうかもしれない。そうなったら生きていけるのだろうか。生きる気力を失ってしまうのではないだろうか。そんな絶望の中、生きるために行動した人たちや、救護や再建にあたった人たちがいたのだ。その人たちの働きにより、今の広島の繁栄がある。私は、広島を取り戻すために動いた人たちに対して、感謝の気持ちでいっぱいになった。

私たちはまず平和記念資料館を訪れた。ここでは、実際に原爆が落とされた時にあった物が展示されていた。一つ一つの物の説明は簡潔ではあったが、心を押しつぶされるような感覚に襲われた。外で遊んでいた時に亡くなった三歳の男の子、仕事で広島に行き、亡くなった女性。まだ生まれて間もない子どもからお年寄りまで、原爆は無差別に人々の人生を壊していったのである。

また、原爆投下後も、後障害と呼ばれる病が、被爆者に猛威を振るったのだ。白内障や白血病、悪性腫瘍などである。中でも、私にとって一番衝撃的だったのは、ケロイドである。ケロイドとは、治ったと思われた火傷のあとの皮膚や肉が盛り上がる病だ。ケロイドは、関節の運動機能障害や見た目の醜さをもたらした。水着になって泳ぐことも、おしゃれをすることもケロイドを発症した人々は、拒むようになってしまったのだ。

原爆の被害は残された人々をも、大いに苦しめ、追い詰めたのである。

今もなお、被災地である広島は募金活動やボランティア活動を行っている。平和記念公園では、身内と連絡が取れていない人々の名簿が置いてある。原爆が投下され、七十二年経った今でも、家族が見つかっていない人々がいる。原爆に終わりはしないのだ。

二日間、平和派遣事業に、平和の使者として参加させていただいたことに感謝したい。私は、原爆という出来事に対して、あまり深く考えたことがなかった。そして今回、原爆について多くのことを知り、学ぶきっかけとなった。原爆によって、見た目が大きく変わった実物を見て触れたり、被爆者の方についてのお話を聞いたりして、原爆を様々な面から見つめることができた。「原爆被

害から何を学んだのか」それは、戦争は二度としてはいけないということである。しかし、核兵器は今なお存在し、その力を欲する者さえいることを私は知っている。きっと私はこの凶悪な兵器の本質を見抜けていないのだ。だからこそ、平和を望む一人の人間として、これからも原爆と向き合っていかなければならない。



平和であること

天神中学校三年 岩田 莉奈

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島は地獄と化しました。たった一つの原子爆弾によって。

私は以前から、広島を訪れてみたいと思っていました。きっかけは、毎年文化勤労会館に掲示してある原爆に関するたくさんの写真です。ただ、写真を見たり、ニュースで聞いたりしても実感が湧きませんでした。まるで、別世界のことのように思えたのです。しかし、平和記念資料館での語り部さんのお話を聞き、私の中でただ単に過去の出来事ととらえていたものが現実のごとく浮かんできました。周りが見えなくなるほどの閃光。太陽と同じくらの熱に当たり、溶ける皮膚。のどの渇きに耐えかね、汚染された川に飛び込む人々。原爆で苦しむこのような姿が、目の前で繰り返り広げられているようで、胸が絞め付けられました。

原爆の被害は、これだけにとどまりません。大量の放射線を浴びたため、原爆投下から数年経って白血病やガンを発病する人が大勢いたそうです。

佐々木貞子さんもそのうちの一人です。二歳の時に被爆し、十年後体に異変を感じました。佐々木さんは白血病になってしまったのです。入院中、佐々木さんは鶴を折り続けました。なぜなら、信じていたからです。「鶴を千羽折ると願いが叶う」という言葉を。ですが、その願いは叶いませんでした。直接的でなく、内側から体をむしばんでいく怖さもあるのだと感じました。

原爆投下から七十二年の月日が経ち、当時より遥かに平和になった世界。しかしながら、今分かっているだけで一万四千九百発の核兵器が地球上に存在しています。しかも、その九十%をアメリカとロシアが保有しているそうです。二度と広島や長崎と同じような惨劇を繰り返さないためにも、核の廃絶は絶対です。

最近、近隣の国でミサイルの開発が進んでいて、またしても日本は危険にさらされています。どうして核兵器を持ちたがるのでしょうか。全ての国が核兵器を捨て、協力し合えば何にもおびえる必要がなくなるのに。

私は、平和の使者派遣に参加して「平和」とは何かと考えました。「平和」とは戦争がないということだけでなく、当たり前のように続く日常があることだと思います。

いじめがなく、互いにあいさつを交わし、困った人がいたら助け合えるなど、私は、この北名古屋市がずっと安心で安全な町であることを強く願っています。そして、この平和な北名古屋市が今以上に笑顔溢れる町になるように貢献でき

平成29年度中学生体験感想文集

る人になりたいと思います。